

昔話からのメッセージ

ろばの子

小澤俊夫

小澤昔ばなし研究所

目次

illustration:
Otto Ubbelohde
Germany 1867-1922

第一章 ろばの子——若者を受け入れる社会

- 「ろばの子」の文法 14
「ろばの子」：旅立つ若者、見守るまなざし 32

第二章 灰かぶり——子どもは揺れ動きながら成長する

- 「灰かぶり」の文法 50
「灰かぶり」：汚い姿から美しい姿へ 75

第三章 桃太郎——さまざまな成長

- 「桃太郎」：無精者の主人公 90
「三年寝太郎」：ようやく起きて悪知恵を働かす 100
「わらしべ長者」：子どもの成長には段階がある 111
「蛇の子しごこ」：親と子の絆 117

第四章 白雪姫——若者は失敗するもの

- 「白雪姫」：三回も失敗したあげくに 124
「金の鳥」：偶然が重なって必然に 151

第五章 かにのふんどし——昔話は弱いものを気にかけている

- 「兄弟の山梨とり」：ものさしはひとつではない 170
「三人の兄弟」：勉強ができなくても 183
「かにのふんどし」：「愚か者」を受け入れる社会 192

おわりに 202

付録

- 「馬方やまんば」 208
「かちかちやま」 211
「うり姫」 215
「ラプンツェル」挿絵（オットー・ウペローデ） 219
興味がある人のために 220

昔話というと、日本では「花咲爺」とか「舌切雀」とか「おむすびころり」などが代表的で、なにか道徳的教訓を語るものだと思います。それらの話では、最初の爺はいつも正直で勤勉でよい報いを受け、あとから出てくる爺は強欲で人まねをして、最後には罰を受けるといのがお決まりです。正直で勤勉は教育にいいというので、これらの話は明治の初めから、しばしば教科書に載ったり、絵本になったりしました。それで日本の代表的な昔話と意識されるようになったのです。

しかし、日本の昔話全体からみたら、決して代表的な話というわけではありません。日本の昔話は九百種類から千種類くらいに分類されるのですが、これらの「隣の爺型」と呼ばれる話は、十二か十三種類しかありません。決して多数派というわけではないのです。

「隣の爺型」ははっきりした特徴をもっています。ひとつは、登場人物が常に老人であることです。もうひとつは、老人である登場人物は、話の初めから、終わりまで、そ

の性質が変わらない、ということですが。第一の爺は最初から最後までいい爺で、第二の爺は最初から最後まで悪い爺で、しまいいは罰を受けます。年寄り是不変なのです。現実の人生でも、年をとると、考え方に柔軟さが失われるということは、あることだと思います。

それに比べて、子どもや若者が主人公の場合には、昔話は、その主人公がさまざまに変化しながら成長していく姿を語ります。私はそこに注目します。

若い主人公の姿は、話のすじの進行とともに変わっていきます。実人生でも、子どもや若者は、変化しながら成長していくのですが、実人生での変化は、長い時間がかかり、日々の変化はわずかです。身近で接している親や先生は、その微妙な変化を、なかなか認識できません。昔話は、実人生では認識しにくい微妙な変化を、短い話にして、はっきりした変化としてみせてくれます。

昔話はそうやって、これまで生きてきた子どもや若者の、さまざまな成長のプロセスを、今生きている私たちに伝えてくれているのです。それはまさに、日本人の記憶であり、人類の記憶なのです。

昔話の伝承を具体的に思い浮かべてください。今八十歳の語り手がいるとすると、その人は、七十年前には、確実に十歳の聞き手だったのです。そのとき、感銘を受けて聞いたから、七十年たった今、年寄りとして語って聞かせるのです。七十年間には、いろいろな人生経験をしたでしょう。自分の子どもを育てたでしょうし、肉親や近所の、あるいは教え子としての子どもたちを見てきたでしょう。そういう人生経験を織り交ぜて語るので、自然に、子ども観察が込められてくるのです。

長い人生のあいだには、いろいろな子どもを見てきたでしょう。しかも、その子の一時期を見るだけでなく、十年後、二十年後のその子の成人した姿も見たでしょう。はなれ小僧で、悪いことばかりしていた子どもが、二十年後には立派な若者になったのを見たこともあるだろうし、三十年後にはまじめな父親になったのを見たこともあるでしょう。だから、人生を、長い流れとしてみる事ができるのです。昔話には、そういう人生観、若者観がしみこんでいるといえます。それは、いわゆる社会的道徳よりもっと根本的な、人が育つとはどういうことか、人は人生をどのように歩いていくのかという問題です。

現代の日本は、核家族で暮らす人が多くなりました。それゆえ、おじいちゃん、おばあちゃんからの、子どもについての知恵の伝承がほとんどなくなってしまいました。そのうえ、社会全体が、互いにばらばらになり、若い親たち同士の間でも、深い交流が少なくなりつつあります。

そういう現代だからこそ、昔の人たちが子どものことをどう見ていたのかを知ることが、とてもたいせつだと思います。それが、歴史から学ぶということだと思います。歴史というと、学校で習う史実ばかりが歴史だと思いがちですが、ほんとうの庶民の歴史は、庶民のあいだでひそひそと口伝えされてきた昔話とか、伝説のなかに込められているのです。

そういう、人生や社会の一番基本にある、生活に密着した歴史というふうに考えたなら、あらゆる民族が伝えている昔話は、人類共通の歴史なのです。私がみるところでは、昔話では、三つのことが大事なメッセージとして繰り返し、繰り返して語られています。人はどうやって育ったのか、人はどうやって食い物を手に入れてきたか、人は自然とどうやって付き合ってきたか、この三つです。私たちは、いろいろな民族の昔話と伝説の

なから、これらのメッセージを読み取ることができるのです。

いっぽう、昔話は口伝えされてきたお話ですから、耳で聞いてわかりやすいような語り口を獲得してきました。小説や新聞などの、目で読むために書かれた文体とはまったく違うのです。それは一口でいうと、簡単明瞭な語り口です。昔の語り手たちは、自分が子どもの頃、話を聞いてよくわかったので、年をとってから、それを思い出して語るのです。子どもの頃聞いた話が、簡単明瞭だったから、鮮明に耳に残り、今、思い出せるのです。

ところが現代では、お話といえど本に書いてあるものがほとんどです。読者は、目で読むのが当たり前ということになっています。話を目で読む場合には、複雑なところがあれば、何回でも繰り返し読んで読むことができます。作者は、読者が読み解いてくれることを期待して、どんな複雑なことでも、詳しく書くことができます。そして、そういうふうに見えることが、作者の能力とされています。

昔話は反対なのです。耳で聞かれるだけです。簡単明瞭でなければなりません。この本では、最初の二章では、まずお話の語り口を丁寧に解説します。それから、その

話の発信するメッセージについて考えてみたいと思います。昔話をもつ独特の語り口の法則を、私は「文法」あるいは「語法」と呼んでいます。なぜ、この本の初めに文法について解説するかといいますと、文法の理解を踏まえなければ読み取れない昔話のメッセージがあるからなのです。